

研究論文

# クライアントの家族に対する対人援助職者の視点に関する研究

～5名の援助職者を対象としたインタビュー調査による質的分析の検討～

飯田 昭 人 (北翔大学 人間福祉学部 福祉心理学科)

寺田 香 (北翔大学 人間福祉学部 医療福祉学科)

黒澤 直 子 (北翔大学 人間福祉学部 医療福祉学科)

斉藤 美 香 (北翔大学 学生相談室)

## 抄 録

本研究では、臨床心理士や社会福祉士、臨床発達心理士、教師の資格を有し、総合病院や発達障害児者対象の相談機関、児童養護施設、特別支援学校で働いている5名の対人援助職者を対象に、クライアントの「家族」をどう考えているのか、家族と接する上でどのようなことに配慮しているのかといった、家族の視点について、主に質的分析により明らかにすることを目的とした。

クライアントの家族に対する対人援助職者の視点として、以下の5点が見出された。①家族への情報等の伝え方に対する配慮～家族に分かってもらえたと感じてもらえるような伝え方、②家族への直接的な働きかけだけでなく、家族が主体的に考えたり活動したりできるための関わり工夫、③クライアントが自分の家族をどう捉えているのかということ深く考えること。クライアントの家族を捉える視点に思いめぐらすこと、④家族を支援することが目的ではなく、クライアントの最善の利益のために、クライアントの家族について関わっていくという視点、⑤家族の「今」だけでなく、家族の「その後」の生活や人生を見据えた上での関わり。左記の結果より、対人援助職者の職種や領域が異なっても、家族への視点として重要な点は変わらないということ考察した。

なお、質的分析のあり方についても、若干の考察を行った。得られたインタビューデータは、インタビュー対象者（語り手）とインタビュアー（聴き手）との相互作用によって生じたものであり、本論では、インタビュアーの要因について考えていくことの重要性を指摘した。

キーワード：家族、対人援助職者の視点、質的分析

## I. 問題の背景と目的

### 1. 家族への支援について

本研究テーマである「クライアントの家族」という言葉について、初めに説明する。「クライアント」という言葉は、社会福祉領域や臨床心理領域では、若干、指し示す意味が異なるであろうが、「何かしらの支援を求め、もしくは支援を必要とする当事者」を指すこととし、「相談者」「利用者」「クライアント」などと、当事者である彼たち／彼女たちにはさまざまな呼称がされるであろうが、その当事者の家族を、本論では「クライアントの家族」と表記する。以下、「家族」と表記する場合は、特に注釈しない限りは、「クライアント（当事者

の家族」を指すこととする。

家族への支援について、対人援助職はどのような職種であれ、理念としては重要であると賛同するであろう。しかし、例えば、働いている領域や職種の違いなどで、家族への対応、家族への支援も様々であると考えられる。

本論の執筆者である私たち4名は、北翔大学における所属学科も異なれば、職種及び領域も異なるが、家族への支援が重要であることは共通の認識であり、研究グループとして家族支援について考えてきた。ただ、グループ内でも、そもそも「家族支援とは何か」「専門家が一方的に家族を支援するのか」「家族だけを支援することでのよいのか」「家族の誰を、どの程度、どのように支援するのか」など、皆で意見を交換し、議論していった。

そういった議論の中で、職種や領域を問わず、優れた実践を行っている援助者は、クライアントへの対応はも

ちろんのこと、家族への対応も優れているだろうという見解になった。

そのような実践に身を置いている対人援助職者が、対人援助を実践していく中で、家族に対して、どういう視点を持ち、どういうことを大切に、どういうことを心がけているのかを明らかにしたいと考えた。特に、職種や領域を問わず、対人援助職者の家族に対する視点は、何か共通する要因があるのではないかと、あるとしたら、どのような要因であるのかを明らかにしたいと考えた。

## 2. 家族を考えるということ

そもそも自明のこのように思われるが、家族とは何かを考えたい。

村瀬<sup>2)</sup> (2006) は家族の定義について「その構成員が結婚、血縁（擬制的関係をも含む）により、結合する基礎的社会集団であり、その基本機能としては子どもの社会化機能の基礎的領域を担う。生活の相互保証機能、および家族成員のパーソナリティの安定化機能がある（布施<sup>1)</sup>, 1992）」と布施の定義を引用している。

続けて、家族を考える視点として、村瀬<sup>2)</sup> (2006) は「家族を考える場合、まず第一に、一人称単数つまり『わたし』の側面にとらえる場合、主観的・内省的色彩を帯びたものとなる。各自の家族イメージなどがその例である。次に、一人称複数つまり『わたしたち』という側面を考える場合であるが、それは社会的・制度的・文化的視点であり、家族についての暗々裏の慣習や家族法などがその現れであろう。第三に、三人称的つまり客観的・科学的な視点にとらえる側面がある。さて、臨床場面で家族にかかわる場合、家族に対しては、よい意味でのバランス感覚ある統一的・包括的な理解が必要であろう。自分の個人史に色濃く彩られた『一人称的』側面に偏った理解（端的に言えば、自分の価値基準に則り、それに相対的視点での吟味を加えない考え方）は、それが鋭利なものであっても、相手の世界に添った理解をすることを、時に難しくする。これは臨床においては不適切であろう。どれか一つの側面に偏るのではなく、これら三側面からの理解を統一的・包括的に行うことが求められている（村瀬<sup>2)</sup>, 2006）」と述べている。

上記の村瀬の視点から、臨床場面において家族について考えていく場合、一面的な見方ではなく多面的であることが求められよう。

## 3. 研究の目的

対人援助業務に従事している援助者を対象に、家族について、どのような視点をもって関わっているのかを明らかにすることを目的とする。そのような援助者の視点が、職種や領域を問わず、共通した要因があるのかどう

か、家族への視点がどう支援と結びつくのかどうかということなども検討していくこととする。

なお、本論では質的研究による分析を試みるが、質的研究による分析のあり方についても若干の考察をしていく。

## II. 研究の方法

### 1. 対象者

本研究の対象者は、表1に示している5名である。

表1 インタビュー対象者の属性

対象者	対象者の性別	対象者の年代	所属領域	資格等	総職務経験年数
A	男性	30代	特別支援学校、特別支援教育コーディネーター	教員免許	10年
B	女性	50代	発達障害センター、相談員	臨床発達心理士、保育士	25年
C	男性	20代	児童養護施設、心理士	臨床心理士	5年
D	女性	30代	総合病院、ケースワーカー	社会福祉士	13年
E	女性	30代	総合病院、ケースワーカー	社会福祉士	14年

対象者については、私たち4名で協議し、以下3点の条件を満たす人物とした。①対人援助業務において、クライアントの家族と関わることもある人物、②研究者である私たちが日ごろからよく知る人物であり、日常の仕事ぶり、外部の評判などを考慮して、対象者として推薦したいと思える人物、③対象者の同僚や同じ領域・同じ職種として働いている人々からも仕事等について意欲的であると推薦された人物。

なお、対象者の所属領域や資格等についても多岐にわたるよう配慮し、対人援助職に共通する家族への視点を明らかにすることを試みた。

ちなみに、インタビュアーについては、A氏、B氏、C氏は飯田が、D氏、E氏については寺田が担当した。

### 2. 調査の手続きについて

#### 1) 調査面接の実施時期

2009年1月～同年10月まで

#### 2) 面接場所・時間

対象者の希望を確認したところ、C氏のみ北翔大学に赴くことを希望し、それ以外の4名についてはそれぞれの所属する職場にてインタビュー調査を希望したので、そのように実施した。時間は対象者によって異なるが、だいたい1時間30分程度のインタビュー時間となった。

#### 3) インタビューの実施方法及び方法

はじめにインタビュー調査の目的について説明を行った。次に質問項目について資料（表2）を提示しながら、一通りの説明を行い、インタビュー調査の流れの枠

組みを理解していただいた。質問等はそこで受けて答えた。また、プライバシーに関することは、個人の特定ができない形で分析を行うことを伝え、また、インタビューについて録音することの許可を求めた。そして、インタビュー調査終了後も、対象者の意思でインタビューデータを破棄することができることを伝えた。

表2 インタビュー調査質問項目

インタビュー調査質問項目
<p>○はじめに</p> <p>本インタビュー調査は半構造化面接により行わせていただきます。すなわち、下記に質問項目を用意しておりますが、質問項目にとらわれることなく、頭に浮かんだことを自由にお話しいただきたいと思います。</p> <p>なお、インタビュアーも適宜、お話しいただいた内容についての確認等のため質問をしたり、感想を述べさせていただいたりします。</p> <p>主に、下記について質問項目を用意させていただいておりますので、ご一読願います。</p> <p>&lt;質問項目&gt;</p> <p>①現在の職種について教えてください。</p> <p>②現在の職場でどういうお仕事をされていますか？可能であれば一日の流れなどを教えてください。また現在の職場より以前に働いていた方は、その当時の仕事内容についても教えてください。</p> <p>③お仕事をされている中で、どういうことに配慮されていますか。気をつけていること、心がけていることなどを教えてください。</p> <p>④いわゆる当事者の方のご家族に対して、どういうことに配慮して接していらっしゃいますか。気をつけていることや心がけていることなどを教えてください。</p> <p>⑤家族と接していて、もしくは家族支援を考える上で困難に感じること、大変なことなどを教えてください。</p> <p>⑥家族支援を実践されていく上で、あなたはということが大切だと思いますか？</p> <p>⑦家族支援を考えるうえで、他機関や異職種の連携が大切だと思いますか？もし、大切だとお考えになるなら、連携する上で心がけていることや大切だと思うことを教えてください。</p> <p>⑧専門職である自分の資質について、どうお考えになりますか。また、家族支援だけでなく、広く対人援助を行っていくうえで、対人援助職者にはどういう資質が求められると思いますか？これまでのあなたのご経験などからお話してください。</p> <p>⑨本インタビュー調査をお受けになった感想について率直に教えてください。なお、ご意見などありましたらあわせて教えてください。</p> <p>※質問項目は以上です。ご協力いただき本当にありがとうございました。</p>

#### 4) 分析方法

本論では、質的研究の中でもエスノグラフィ的視点に依拠し、特に、エスノメソドロジー／会話分析を参考にしている。それらを依拠及び参考にした理由の詳細は、【IV. 総合考察】の【4）本研究における質的研究の意味】で述べていくが、語り手の語ったことは誰を聴き手としていたのかということがとても重要であると思われることを強調したい。例えば、質的研究の代表的な分析方法の一つであるグランデッドセオリーアプローチは、新たな理論の生成を目指すためのものであり、また、優れた分析方法ではあるが、聴き手の存在に言及されていないように思われる。だが、語り手は、聴き手の要因によって語られる内容が当然異なるはずであるのに、その聴き手の要因を考慮に入れないのは不相当であると考えた。本研究では、語り手と聴き手は相互に影響し合っているという立場から、そのような互いの影響を考慮していると思われる分析方法として、エスノメソドロジー／会話分析を参考にした。

実際には、インタビューデータを逐語録にし、その中でインタビュー対象者が特に家族についての視点が表現されているところを抽出した。その抽出した文章を私たち研究メンバーで討議をして、特に家族への視点として重要なことが語られていると考えられた代表的な語りを選定した。

その選定にあたり、インタビュアーである飯田と寺田がインタビュー時の様子をインタビューメモなどから他の研究メンバー（黒澤、斉藤）に伝え、また、インタビューの逐語録の内容を皆で検討し、家族への視点について、インタビュー対象者が力を入れて語っていると思われるところを皆で討議し抽出した。インタビュー対象者が力を入れて語り、またインタビュアーもそう感じた2人のやりとりの代表例を、以下の表3、4、5、6、7に示していく。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 対象者A氏の語りとそれについての考察

表3 A氏の語りの抜粋

<p>A：家庭の中の子ども像と学校の中の子ども像について、隔たりのある場合がありますね。家族、特に親御さんですが、学力に重点を置いてもらいたいと要望される親御さんもいれば、友達とうまく付き合ってくればよいと考える親御さんもいます。親や家族の求める基準や要望などは同じではありません。また、私は現在、特別支援教育コーディネーターという、先生方からの相談も受けていますので、先</p>
--

生方の子どもや家族に対する要望なども聞くことが多いです。ただ、やはり、子どもの人生に最も責任あるお立場である保護者や家族の要望をないがしろにすることはもちろんできませんし、その保護者や家族が納得のできない形で、学校での指導や関わりが行われていくことは、その子ども自身にとっても良いこととは言えないと思うのです。ですから、ご家族の方々が納得していただけるような支援の在り方が私の中のベースにあります。例えば、家族の方とより深く理解しあえる方法の一つとして、家族の了解を得て、授業の様子をビデオ撮影し、ありのままの子どもの様子を見てもらうのです。担任の先生やコーディネーターである私が、言語を用いて、子どもの現状や困難性を指摘しても、家族の方からすると、どこか責められているというか、納得できない思いが強く残ることがありますが、実際にビデオを見ていただき、担任のやり方が大きく間違っておらず、それでも子どもがつらそうにしていたり、問題のあるような行動をしていたりする状況を実際に見ていただき、「お子さんのことで、こういう心配が学校ではあるので、一緒に考えてほしい」と、家族に伝えることがあります。そういうことが家族と一緒に子どものことを考えていききっかけになったということはありません。

飯田：先生方や学校のやり方と、家族のやり方に大きな隔りがある場合、困難を感じると思うのですが、A先生は、家族をないがしろにしない、納得していただけるようなものを家族に対して示すことができないといけないのだと、おっしゃってくださったように思いましたが。

A：家族の納得のいかないところでの、家族が強引と感じるような、支援をすることはいけないと思いますね。私は自分の立ち位置として、どちらかという、家族寄りだと思のです。もっと保護者を指導したり、教えたり、子どもに対する望ましい対応方法を家族に身につけてもらったりしたほうがよいと先輩や管理職の先生から言われることがあります。そういったご指摘も大切だとは思いますが、家族に対して「こうあるべき」と納得していただくよりは、現実や現状をしっかりと家族に説明できるこちら側の在り方が大切だと思のです。実際に、言葉で説明しても家族が納得できないのはむしろ当然で、私たちも目に見えないことを説明されても、いくら想像力を巡らしても、現実に家庭生活で起こっていないことを想像するのは難しいと思うのです。それよりは、先のビデオの話ではないですが、家族にわかりやすく、現実や事実を伝える、そういう努力を、家族と接している立場の者は忘れてはいけないと思うのです。現実や事実をもとにして考えなければならぬことが大半であり、そういうベースで家族と話をしていかなければならないと思います。そこから、共通理解や、パートナーシップと呼ばれるような、異なる立場であっても、同じ考えで子どもとかかわっていくことができるようになると思います。そういう意味では、主役は家族であり、当然子どもであり、そして日々奮闘されている担任の先生であり、コーディネーターはそういった人たちの間で調整を行い、共通理解がお互いに図れるようなそういうことが求められていると思います。

飯田：家族はもちろんのこと、A先生のお話からは、相手にしっかり伝えることの大切さをお話しいただいたと思います。また、家族をはじめとして、いろいろな人々の視点に立って考えられているのですね。

A：そのようにできているかわかりませんが、そうありたいと考えています。

知的障害児対象の特別支援学校（養護学校）において特別支援教育コーディネーターをしているA氏は、普段は自身の所属する学校で教師として活動したり、また近隣の小中学校やと特別支援学校で、教育相談に従事したりすることが多い。

A氏の語りからは、児童生徒の家族、特に保護者への伝え方の重要性が指摘されていた。A氏は、教員として、そして、コーディネーターとして、数多くの児童生徒の家族と関わってきた。その中で、家族に伝えるということの難しさ、また家族に分かっていただくということの大切さを、日々の家族との関わりの中から考えてきたのであろう。語りの中で表現されていたが、ビデオといった視覚的な情報を家族とともに検討し、家族にも現状を理解していただく努力をしながら、今、何が求められるのかを一緒に考えることが述べられていた。

また、事実に基づいて伝えることの重要性も指摘されていた。ときに、専門家は、自分の経験からの推論を家族に伝えることがあろうが、事実に基づいて考えていくことが、家族を考える視点で重要であるということが、この語りから示唆された。

伝えるという行為は、伝えられる立場の者が「よくわかった」「そういうことなのか」という気づきや理解を得られることとセットになって、初めて成り立っているのだということが考えられよう。

## 2. 対象者B氏の語りとそれについての考察

表4 B氏の語りの抜粋

B：障害のある子どもさんのことで、家族、特にお母さんから相談を受けることが多いので、相談を受けて、一緒にお母さんのお話を聞いて、お母さんの気持ちや辛さに身を添わせるようなこともしますし、また、指導と言いますか、家庭での過ごし方や、子どもさんのことで困った問題などありましたら、助言指導することもあります。そういうことも大切なのですが、家族を考える上で、私は、親同士のつながりというもの大切だと思います。以前から親の会はあり、その親の会は、障害のある子どもたちのためにいろいろ親が勉強していくといいますが、どこか親は子どものために勉強しなければならないというような雰囲気すらあったと思うのですね。私は支援者という立場で、親御さんの相談を受けたり、子どもたちのことで助言や指導させていただいたりする中で、家族や親御さんが求めているのは、障害のある子どもたちのための勉強や接し方ばかりではないと、あるとき、そう気付いたというか、思ったのですね。親御さんや家族が、たまたま自分の子どもたちに障害があるということで、他人にはわかってもらえない悩みや愚痴などもあるでしょうし、専門家

と呼ばれる人に言われることと、同じ障害のある子どもを持つ親御さんから同じことを言われても、伝わり方は違うと思うのです。家族同士、親同士だから分かりあえたり、もう少し、子どもの対応で工夫したいと思ったりすると思うのです。また、専門家と呼ばれる人が目立ちすぎると、家族は受け身になると思うのです。子どもの対応も「先生に言われたから」となってしまうがちで、そうではなくて、自分たち家族は子どものことや家族のことや自分自身のことをどうしていきたいかを主体的に考えていただくことが大切だと思うのです。家族支援と言うと、何かこちらが支援を提供しているように聞こえることがあると思いますが、家族が主体的に考えたり実践したりするのを、ちょっと手助けしたりすることのほうが大切な場合があるということを知りましたね。実際、年齢の上のお子さんをもつ親や家族は、年齢の低い子どもを持つ親や家族に、自分たちの経験から、今しておいた方がよいことを率直に伝えたり、その時親が感じるであろう困難や辛さも子どもの年齢が上の親や家族はよくわかることが多いので、しっかり気持ちを受け止めながら話を聞いたりされているのです。

飯田：専門家であるB先生の伝える言葉や話もある家族にとっては「わかってもらえてよかった」などと思うこともあるでしょうが、その同じ言葉を親同士で伝えあうことのほうが、その親や家族は、B先生に言われたこととはまた少し違った意味で、「わかってもらえた」「やっぱりそうなんだ」などと受け止められたりできる。こちらが何か支援をするとか、何かを与えるということよりも、親や家族が自分たちで主体的に活動したり、悩みを抱えたりできるような、そのような支え方が大切だと理解しました。

B：そうですね。そして、親や家族の集まりや親の会自体も、自分たち親だけではなく、地域の人たちや専門家と呼ばれる人たちを巻き込んで、子どもの幸せのために、何ができるのかを考えていくことが大切で、親や家族の視点だけではなく、地域の人たちの視点、専門家の視点など、参加者みんな、いろいろな視点から学んでいけることが大切だと思います。

飯田：それぞれの立場をそれぞれが尊重し、家族だけが支えられるのではなく、実は地域の人たちや専門職援助職も、支えられていることがあるのだというように考えました。

B：ええ。例えば、ある援助者が「さすが、お母さんだからそういうかわりができたんですね」と言われると、その親御さんもうれいでしょうし、主体的により考えていくことにつながりますし、また親御さんも「こういう場合どうしていったらよいか」と考えた時、「こういうところを利用したらよんじゃないか」とアドバイスを受けて、もしくは自分で「こういうふうにしてみよう」と考えたりと、一方的に誰かが誰かを支えているのではなく、うまく支え支えられるという流れが循環しているのが大切ではないかと思えます。

B氏は保育園やことばの教室などの勤務経験があり、現在、発達障害を抱える子どもやその家族への相談業務などを中心に行っている。

B氏の語りからは、専門家から家族に対しての一方的な支援に留まらず、家族同士、そしてある家族と別の家族同士の結びつきの重要性を指摘し、保護者や家族が自

ら物事を考え、様々な状況に対して主体的に対応できるような、そのような援助者のあり方が重要であると述べていよう。

発達障害については、昔から多くの親の会が存在するが、B氏がかつて関わっていた当時の親の会は、専門家の意見を待つ、受け身的な姿勢になっていた。B氏は、専門家の意見を待つだけの姿勢では、子どもたちのためにも、そして家族自身のためにもならないという思いを強く思ったことが語りから推察された。

保護者や家族が主体的に子どもたちに関わっていくことの重要性をB氏は語りの中で強調するとともに、支援や援助と呼ばれるものも、単純な「専門家から家族へ」という一方向ではなく、家族からも専門家は学ぶことが多くあり、本来、支援という営みは循環的に行われていることが大切であるということが、B氏の語りからは示唆された。

### 3. 対象者C氏の語りとそれについての考察

表5 C氏の語りの抜粋

C：自分の自負心が強かった時期がありまして、養護施設での過酷な勤務状況の中で、特に誰からも自分の仕事における子どもへの接し方を評価してもらえないわけではない状況で、自分がこの子どものことは一番理解している、この子どもも自分を一番身近な大人として認めてくれていると思った時期がありました。そのような独りよがりな自分の状態だったのですが、たまたま母親が施設に訪れた時、幼児であるその子どもが、失礼ですが、たかだか年に数回しか現れない母親のもとに、一心不乱に駆け寄るのを見て、人間関係の深さと言いますか、こちらが一生懸命子どものことを考えているから、子どもとの関係が深まるのかというと、そうではなく、その子どもと母親の間には様々な計り知れないことがあるのだと思いました。この子がまさにリアルタイムに成長しているのを私はじかに見て、関わっていても、親にはかなわないと言いますか、理屈ではなく、この子にとって、母親はやっぱり母親であり家族なんだということが、実際の感覚として経験できたことがあります。子どもと関わっている時間の長さや、子どもに何かしてあげているとかそういうものの多さではない、この子にとって、この母親は、かけがえのない存在であり、大切な家族なのだと思えたとき、その母親が社会的に見て望ましくないような言動や対応であっても、この母親や家族に真剣に向き合っていかなければならないということを考える機会になりました。

飯田：専門家である自分の視点から、何か子どもや家族に教える論ずということよりも、子どもの視点から何が見えるのか、特に一人ひとりの子どもが思い描いている家族像、家族の思いを大切にされており、その子どもが親や家族を大切にしているという現実をC先生は大切に、そういう現実から、自分や施設全体として、どのように家族にかかわっていけばよいかを考えていらっしやるように私には伝わってきました。

C：養護施設で働いていれば、職員であれば誰しも一度は、自分が強い思いを持って子どもと一緒に暮らしているにもかかわらず、あまり現れない親との面会を心待ちにしている子どもを見て、ショックを受けますと思うのです。でも、私たちが親や家族になれないですし、純粋な親や家族になることが大切なのではなく、その子が今後生きていくうえで、どのように親や家族のことを考えていくことが子どもにとって良いことなのか、そういう視点から子どもや家族に、私はそして施設全体としてどうかかわっていくかが大切だと思うのです。

飯田：インタビュー調査をしていて、家族支援といいますか、家族への働きかけを行う援助職には、何か共通した意識や考えあるのではないかとこの考えのもとで始めさせていただきましたが、C先生のお話をうかがい、月並みな表現かもしれませんが、一人ひとりの子どもを大切に、その子どもが大切にしている家族のことも大切に考えていく。そうした中で、自分や施設全体で、どう考え、どう具体的に子どもや家族と関わっていくことが、その子どもや家族のためになるのかを真剣に考えていってほしいなと思いました。また、子どもが自分の親や家族を比較的肯定的に捉え続けることができているのは、施設の先生たちが日々の生活を通して、よき大人の模範として子どもと関わるができているからなのではないかと思いました。

C：あまり、外の立場の先生から自分たちの関わりを評価していただくことが少ないので、そうおっしゃっていただけると嬉しいです。

C氏は児童養護施設の心理士として働き、一度公的機関の心理士なども経験しながら、現在は再び児童養護施設の心理士として働いている。

C氏は、児童養護施設に入所している子どもとの具体的なエピソードから、子どもと親の結びつきの強さについて語っていた。そのエピソードからは、援助者である自分の視点からの見え方ばかりではなく、施設に入所している子ども一人ひとりが自分の家族のことをどう考えているのか、子どもの視点に立って考えることの重要性を指摘している。それが顕著にうかがえるのが、C氏の「自分がその子どもに関わっている長さや、何をしてあげているのが大切なのではなく、理屈ぬきにその子自身にとって親や家族が大切なのだと素直に思えたとき、親や家族に真剣に向き合わなければならないと思うようになりました（一部筆者ら要約）」という語りである。

C氏の語りからは、家族に何か直接的な働きかけを行うばかりではなく、子どもとの関わりを通し、子どもが施設職員との関係を通じて成長していくことが、家族にとっても自分たちの在り方を振り返る機会となり、それが家族支援につながっていくのではないかと考えた。

#### 4. 対象者D氏の語りとそれについての考察

表6 D氏の語りの抜粋

D：家族だからと言って、必ず患者のために何かしなければならぬ、何かしてくれるというように思っはいけないと考えています。患者と家族の関係性によっては、家族ができないことがあるので、無条件に、家族が患者の社会資源になってほしいと思わないようするというのも重要だと思えます。あとは逆に、家族関係のある程度出来上がっている家族だと、家族の一員に病気を発症した人が出た場合に、それが家族の生活に少なからず波及したり影響したりするので、どのような形で影響が出るのかを必ずアセスメントするようにしています。また、情報の取り扱いに気をつけるようにしていて、患者と家族との関係性の良い悪いにかかわらず、この人はこれを知って、この人はこれを知らないというのが多いので、どこまで誰に言ってよいものかどうか、最終的に決めるのは患者なのですけども、その情報がどう整理されているのかを気をつけるようにしています。それと家族と言っても、複数いて、それぞれ違う立場の人なので、それぞれが患者の病気に対してどう思っていたり、どんな希望を持っていたりするのかなど、そのどこにウエイトを置くのかなどを考えるようにしています。

寺田：ソーシャルワーカーとしての私たちは、家族を社会資源と捉えることがあると思います。家族支援を取り上げて、何をしていますかと言われたときに、普段、家族支援ということあまり意識していないのではないのでしょうか。ワーカーとして患者のために行ってきたことが結果として家族支援になったのかもしれないけど、「家族を支援しましょう」といって、そこだけ取り上げられたら、インタビューとして申し訳ないのですが、あまりイメージできないのですよね。

D：私が家族支援を強く感じるの、がんの患者の、予後が短いですが、こちらで間もなく亡くなってしまうというときに、家族への支援について、よく考えるようになりましたね。遺族ケアみたいなものが、患者が生きている間から、家族に対して始まるといいますか、残された家族がどう生きていくのかを考えていくことは、がんの患者さんのケースが多い。他の患者さんのケースでは、いま、寺田さんが言ったように、患者を中心に考えて、その結果として家族のことを考えているのだと思います。

寺田：例えば、高齢者の方を在宅で介護するのに、独身の息子が仕事を辞めて、家で介護を始めようとするときに、今の介護も確かに必要で大切なだけけれども、これからの生活を考えていくときに、患者と同じくらい、介護をしようとしている息子さんに「あなたの人生のことも大切なよ。そういうことについて一緒に考えていきましょう」というのが、家族支援と呼べるものになるのでしょうか。

D：そうですね。ただ、家族支援という言葉は、何か家族だけを支援しようとする言葉に聞こえ、違和感を覚えることは確かにありますね。

寺田：結果、家族を強化することで、良い介護をしていただくにはどうしたらよいかを家族に考えてもらうことはある。ただ、やっぱり、クライアントを中心に考え、クライアントの中のソーシャルワークにある家族が大切で、家族支援としての家族だけをポツと取り上げられても、何か違和感を

覚えますね。Dさんにインタビューしながら、そういうことを私は考えました。

D：家族支援ということだけを考えるのは難しいですね。ですから、家族支援において大切なことは何かと聞かれたら、「家族だけではない」ということでしょうかね。家族成員の中に、ソーシャルワーカーが契約しているクライアントがいます。クライアント本人だけではない、家族だけでもない、その塊と言うか、関係性の伴うシステム全体に、私たちは見たり関わったりしていくというのが、ソーシャルワーカーとしては大事になっていく。そのシステムには、また、その周囲に別のシステムがあるわけだから、そのクライアント、クライアントの家族、クライアントや家族を取り巻く社会というように、視点をミクロから広げていったり、またミクロに戻していったり。

寺田：ソーシャルワーカーは、ミクロからメゾ、マクロと言う視点で考えますね。

D：生じる問題も個人の問題、家族との問題、もっと上位概念の社会としての問題がありますから、そういった問題を考慮しながら、時に家族と関わっていくことが求められると思います。

D氏は、総合病院の医療相談室でソーシャルワーク業務を中心に働いている。

D氏の語りからは、家族をクライアントの社会資源として見なすことの功罪について触れられている。クライアントがさまざまな困難や不利益を被っていたとしても、家族だけがその責任などを負うべきでないことを強調していた。なお、家族への情報等の伝え方に対する配慮についても語られていた。

また、家族支援というカテゴリに対して、D氏ならびにインタビュアーである寺田からも疑義が示された。

D氏の語りからは、自分の所属している病院でソーシャルワーカーとして契約したクライアントのためにできることを行っていくことが大切であると述べられている。ただ、そのクライアントのことだけをソーシャルワークすればよいのかというところではなく、ミクロ・メゾ・マクロという異なる視点から考えることが大切であるということが2人のやりとりから重要だと語られた。家族と関わる目的が、クライアントの利益につながるためのものであることが語りから強調されていた。

## 5. 対象者E氏の語りとそれについての考察

表7 E氏の語りの抜粋

E：私がまだ若い時のワーカーとして最初のころは、クライアント本人にしか目が向かず、その背後の家族という視点がほとんどありませんでした。家族のことを考えるようになったのは、それから少し経ってからかもしれません。家族のことを考えられるようになったのは、私自身がソーシャルワーカーとして成長してきたこともあると思いますが、私の身内である家族の問題、祖母の介護などを通して、

家族が引き取るとか簡単に引き取れないなど、自分自身がそういう経験をして、家族の視点で考えることの重要性を学んだからだと思います。

寺田：仕事から学ぶことが多いのはもちろんですが、私生活とどうか自分自身の生活から学ぶことも多いですね。

E：そうですね。次の話もそうなのですが、精神科デイケアに、私が20代のときにいたとき、クライアントさんが私と同世代の女性で、その親は、私の親と同世代ということがありました。クライアントの親は、簡単に言うともとも口うるさく、こんなに口うるさければ、クライアントさんが不安定になるのも無理がないと思い、まるで、「クライアントさんと私」パーサス (VS) “クライアントのお母さん” というような図式で、私はクライアントさんと結託したような気持ちになってしまったことがあります。当時は、そのお母さんを支援しようという気持ちよりは、どうしたらそのお母さんが厳しい攻撃的口調をクライアントさんに言わなくなるか、ややもすると、どうすればこのお母さんからこのクライアントさんを救えるかとさえ考えてしまって、そういう対応は、そのクライアントさんのためにならなかったということがありました。

寺田：そういうことは経験しますよね。私の経験でも、介護が必要な女性の息子さんのお嫁さんが、自分の仕事を辞めて義理の母親の介護をしようか悩んでいたときに、「義理の母親の介護で、あなたのキャリアに傷をつけることはない」と、過度に気持ちが入ってしまったことがあります。そのお嫁さんや息子さん、そして介護を必要とされるその方の意向を大切にしていっただけですが、実は、こちらの意向を優先して物事を進めてしまったというような後味の悪さが残りました。

E：どうすることがクライアントさんにとって良いのかを考えることも大切ですし、家族の思いや希望も大切ですし、なかなか難しいですね。ちなみに、家族を責めない、家族に対して自分自身の人生や生活を大切にさせていただくということは心がけていますね。

寺田：家族の生活ということを考えるとき、よくカウンセリングで言われる「今、ここで」ということも大切ですが、ソーシャルワークという視点で考えると、「今、ここで」だけではないような気がするのですが、いかがでしょうか。

E：そうですね。例えば、親の介護のために、息子さんが会社をやめ、親を引き取ると言い出したとして、「介護をしてくれる人が見つかってよかった」という風に単純にはならないですね。その息子さんには、その後の生活について確認しますよね。例えば、「仕事を辞めた後のお金はどうするのか」「介護が必要でなくなった場合、あなたはどうするのか」といったことなど。今、寺田さんがおっしゃられたように、「今ここで」だけではなく、家族の「その後の生活」をイメージしながらのかかわりが大切になってきますね。過去と現在と未来をつなげて考えていくといえますか。

寺田：ソーシャルワークと言うのは、「流れ」ですとか、「プロセス・過程」をみるものだと思うのですね。どこから来て、どこに向かうのかと言いますか。そういう視点や目配せができるのがソーシャルワーカーであると、Eさんの話を聞いて、私はそのように思いましたね。

E：「今、ここで」を大切にしながら、「今、ここではないところ」も大切にしていかなければならないといえますか。あ

と、ソーシャルワークの価値倫理と言いますか、クライアントとしっかり向き合うということは、そのままクライアントの家族にも当てはまることだと思います。ですから、ついクライアント本人の利益ばかりに目が向くと、気が付いたら家族をただ説得しているときもあるでしょうし。でも、本当は家族のこともしっかり考えていかなければならない。例えば、介護で、家族が自らの意思で「おばあちゃんを引き取ろうか」となれば、まだ、よいですけど、「まるでワーカーに引き取れ」と言われた印象を持ってしまった場合は、後者ですと、虐待のようなことが懸念されますので、やっぱり家族を強引に説得するというようなやり方はあまり望ましくはないですね。

寺田：そうですね。でも、そう考えると、家族支援と言葉では表現できますが、考えると、とても難しいですね。

E氏は、総合病院の医療相談室でソーシャルワーク業務を中心に働いている。

E氏の語りからは、E氏の若いころのエピソードより、クライアント自身には着目できていたものの、その家族については、対応が十分でなかったことなどが語られた。また、家族の視点を考えるようになったのは、E氏自身の日常生活における様々な出来事（例えば、家族の介護）からであり、家族を考えていくに当たり、援助者が自分の日常生活をどう過ごすかということも大切であることが示唆された。

なお、クライアントおよびその家族の、今ここでの生活だけを考えるのではなく、過去から現在そして未来へとつながる、一連の過程として、クライアントにも家族にも関わっていくことの重要性を述べている。特に、「その後の生活」をクライアントだけではなく、家族もきちんとイメージできるような関わりが大切であるということが語りから強調されていた。

## IV. 総合考察

### 1. 家族に対する視点について

本研究の表題に、「クライアントの家族に対する対人援助職者の視点」と表記したが、「視点」という言葉を調べると、「視線の注がれるところ。また、ものを見る立場。観点。」とある（広辞苑第五版<sup>5)</sup>、1998）。

5人の対象者から語られたことをまとめると、家族に対する対人援助職者の視点（ものを見る立場、観点）として、以下の点が挙げられた。

#### 1) 家族への情報等の伝え方に対する配慮～家族に分かってもらえたと思ってもらえるような伝え方

懇切丁寧に、現状や問題点、課題などを家族に伝えることは大切であるが、こちら側が「伝える」ことが大切

なのではなく、家族側が「伝わった」「よくわかった」と思ってもらえることが大切であるということが本研究から示唆された。

A氏の述べた「事実に基づいて、相手に分かってもらえたと思ってもらえるような説明の在り方」が重要であり、D氏の「ある情報を誰に、どのように、どの程度伝えるかに配慮している」という語りにあるように、家族に対する情報の伝え方は、援助職にとって最も敏感にならないといけないことであると考えられる。

#### 2) 家族への直接的な働きかけだけではなく、家族が主体的に考えたり活動したりできるための関わり工夫

援助者が一方的に家族を支援するのではなく、家族が自分たちで物事への対応ができるようになることこそ、大切である。また、支援や関わりというものは一方向的にただ発信されるものではなく、援助者も家族の視点や要望、意見などから多くの示唆を受け、さらに考えていくというように、循環的なものであるということが本研究より示唆された。B氏の「家族が自分たちでどうしていきたいのか主体的に考えてもらうが大切」という語りにあるように、援助者は、クライアントだけでなく、その家族に対しても、ただ、関わっていくのではなく、家族の主体性を尊重した、家族が自ら対応できるような、関わりが重要であると考えられる。

#### 3) クライアントが自分の家族をどう捉えているのかということ深く考えること。クライアントの家族を捉える視点に思いめぐらすこと

外見上、問題や不備があるように見える家族であっても、そのような家族をクライアントはどう捉えているのかという視点を忘れないこと。クライアント自身が自分の家族をどう見ているかということをしかりと吟味し、クライアント本人や家族に関わっていく必要があることが、本研究より示唆された。

特に、C氏の語りから、養護施設に入所している子どもが自分の家族を強く思っているエピソードが紹介されていたが、ともすれば、援助者はクライアントの環境調整という名目で、家族を指導の対象にすることがある。それ自体を否定はしないが、クライアントが家族をどう考えているのかという視点を忘れてはならないであろう。

#### 4) 家族を支援することが目的なのではなく、クライアントの最善の利益のために、クライアントの家族について関わっていくという視点

家族を支援する、もしくは関わっていくことの意味を考えずに、ただ、家族を支援することが大切だというこ



とではない。家族と関わることで、家族自体に何かしらの良い影響をもたらすことはもちろんのこと、家族への関わりが、あらゆる面において、クライアント当事者の最善の利益につながることを考えた上でのものであるということが、本研究より示唆された。

特に、ソーシャルワーカーである、D氏、E氏からは共通して話題に上がっていたが、家族に関わったり、家族を支援したりすることが先にあるのではなく、家族に関わることは、クライアントの最善の利益のための手段であるということを念頭に置くべきであろう。やみくもに、家族だから関わる、支援をするのではなく、目的に応じた家族への関わりが求められるのであろう。

### 5) 家族の「今」だけではなく、家族の「その後」の生活や人生を見据えた上での関わり

家族への支援や関わりが、「今、現在」のことだけに限定されるのではなく、過去のつながりを丁寧に吟味し、今、現在を踏まえ、その後の未来のことを考えた対応が望まれよう。特に、その後の家族の生活や人生を考えた関わり的重要性が本研究より示唆された。

このことは、5人のインタビュー対象者より共通して語られていたが、援助者の今現在の関わり、支援が、クライアントおよび家族のその後の生活にどう影響していくのかなどを見据えた上でなされるべきであり、「今、現在のみ」のために行われるべきではないということが言えるだろう。

対象者5名は様々な領域で対人援助業務に従事しているが、上記5つの見解は領域や所有している資格に関わらず、共通しているものと考えられる。この5つの見解について、所属する領域や職責などにより、とても重視する見解と、そうでない見解はあるだろうが、家族を考える視点としては大切な視点であると考えられる。

## 2. 家族支援について

主に、ソーシャルワーカーである、D氏、E氏およびインタビューであった寺田は、家族支援という概念に疑義を呈していた。【1. 家族への視点】の【4. 家族を支援することが目的なのではなく、クライアントの最善の利益のために、クライアントの家族について関わっていくという視点】で述べられていることと共通するところであるが、家族支援そのものが目的となるのではなく、何かしらの手段として、家族を支援していくこと、家族と関わっていくことが求められるのであろう。「困難を抱えている家族であるから」「つらそうにしている家族がいるから」ということだけではなく、家族を支援していく根拠を様々な立場の者に説明できることが重要

であろう。

究極は、家族の側が、自尊心を損なわれることなく、「自分たちが頑張ったから何とかになった。でも、周囲の方々にも多少お世話になった」と思ってもらえることが家族支援の理想ではないかと考えるところである。

### 3. インタビュアーの要因について

本研究では、臨床心理士の資格を持ち、警察心理職やスクールカウンセラー、発達障害児療育センター等に従事していた飯田と、社会福祉士および精神保健福祉士の資格を持ち、ソーシャルワーカーとして、精神科病院、老人保健施設、ターミナルケアを主とする病院等に従事していた寺田が担当した。

次の4の【本研究における質的研究の意味】でも触れるが、語り手の語りは、その話を聴く、聴き手の存在なしには成立しない。そうであれば、語り手によって語られた内容は、語り手の経験や素質などから語られたものである一方、聴き手との間で産み出されたものであるともいえよう。したがって、本研究において、語り手が有している知識や経験、これまでの考え方やセンスなどが十分に語られていないのであれば、それは聴き手の未熟さによるところも大きいと考える。

インタビューを務めた飯田と寺田は、それぞれの経験年数や価値観、考え方は異なるものの、次の点については互いに確認していた。①対象者の話に耳を傾け、想像力をめぐらし、その状況を思い描くようにする。②そして、語られた内容について、不明な点は確認するとともに、その話を聴いて、感想を述べ、時に、私たちの経験から考えてきたことを対象者に伝え、そのことで対象者に意見を求める。この2点に配慮し、最低でもインタビュー対象者に「インタビューに応じて少しは良かった」と思ってもらえるように配慮した。

まだまだ未熟ではあるが、飯田は、児童養護施設で働くC氏の語りから、「過酷な勤務状況の中で、施設職員は子どもたちの視点から何が見えるのかを一生懸命考え、大切にされてきた。日々の生活を共に過ごしている施設職員の存在があるからこそ、施設にいる子どもたちの多くは、離れて暮らす家族のことを大切にできるのだ」という考えが浮かんだ。飯田は、そのことに変感を受け、そのままC氏に伝えたところ、C氏からは「外の立場の方からそのような評価をいただくことはあまりないので、素直にうれしいですし、自分たちのやり方が間違っていなかったことを確認できてよかったです」とおっしゃっていただいた。インタビュー対象者にとっても、何かしらの利益や気づき、ヒントなどをインタビューで見えるような、インタビュアーの要因が大切であると考えた。

#### 4. 本研究における質的研究の意味

##### 1) 質的研究から見た本研究

能智<sup>3)</sup> (2008) は、「質的研究とは、データの収集、分析、結果の提示のために、数値的表現ではなく、言語的表現を使用する研究法の総称である。比較的少数の事例を対象として日常場面における観察や自由度の高いインタビューを通じて質的データを収集し、そのデータの意味に注目しながら、分析を進めていくことが多い」と、質的研究法について述べている。そして、質的研究の質を見る視点として、能智<sup>3)</sup> (2008) は次の3つの視点を指摘している。以下、能智の指摘を筆者なりにまとめたものである。

第1の視点は、“依拠可能性”であり、収集されたデータがその後の分析、つまり、仮説生成やモデル構築などといった作業のために、頼りになるかということである。質的研究の領域では、収集されたデータについて、「分厚い記述」という呼び方がある。佐藤<sup>4)</sup> (2008) は「分厚い記述 (thick description)」について「主に、調査現場でつけるフィールドノーツの詳細な記述などを通して現地社会の生活と人々の行為の意味を明らかにすることを指していた。それがいまでは、すぐれた質的研究の報告書に盛り込まれている、研究対象や調査現場の状況に関するリアルできめ細かい記述を指す意味でも、“分厚い記述”という言葉が使われることが多くなってきた。実際に、すぐれた質的研究の報告書や論文の文面からは、それが丹念で地道な研究や実践にもとづいており、また調査データそれ自体のなかに、現場の状況や人びとの語りがていねいに書きこまれていることが読み取れる場合が少なくない」と述べている。

第2の視点は、“信用性”であり、集められたデータに基づく推論や主張が説得力を持っているかということに関係している。

第3の視点は、“転用可能性”であり、研究の結果が特定の対象やデータを越えて別の場面に利用できるかどうかという基準である（以上、第1～3の視点は、能智<sup>3)</sup> (2008) による見解を筆者たちなりにまとめたものである）。

本研究からは、能智の指摘する3つの視点について、以下のように考える。第1の視点である、依拠可能性についてであるが、分厚い記述ということに関しては、物足りないかもしれないが、本研究のデータは、対人援助職が家族について考える視点をまとめたものとしては、依拠できるデータであると思われる。インタビュー対象者は他者からもその仕事ぶりを評価された人物であり、語られたデータはとても説得力のあるものであると考えている。第2の視点である信用性については、私たちは

本論で主張を明快に述べてきたつもりではあるが、十分とは考えておらず、本論をお読みいただいた方々の判断を待ちたい。第3の視点である転用可能性については、対人援助領域で働いている全ての職種の方々に、家族への視点を考える上で有用であると考えており、この視点は満たしていると考えている。

##### 2) 研究のあり方について～インタビュアーの重要性和本研究の求めるところ

好井<sup>6)</sup> (2004) は、インタビュアーの重要性について次のように述べている。「調査という営みを“わたし”がおこなう以上、そこから完全に“わたし”を消し去ることなどできない。とくに、フィールドワーク、社会問題のインタビュー、生活史の聞き取り、ライフストーリー、エスノメソドロジ的な相互行為分析など、いわゆる質的な調査をどのようにおこなうのか、あるいはどのようにおこなわれているのかを考えると、調査するわたし”の存在や、その営みのありようを微細に考えていく作業は回避し得ないものだ」と指摘している。

私たちは、上記の好井の見解を重視している。【3. インタビュアーの要因】でも述べてきたが、語りとは、語り手と聴き手がいて成立するものであり、どのような聴き手であっても、語り手は同じような語りをするとは限らない。

インタビュアーが重要なのは、語り手の話をただ聴いているのではなく、インタビュアーの思考過程の中で、語り手の話を分類し、整理し、インタビュアーの見解としてではあるが、語り手の話をよりわかりやすく、明解になるような作業を行うことであろう。もちろん、語り手が「今日、自分がここで話すことができてよかった。」とだけ思っていたら、できることなら「インタビューをする中で、自分（インタビュー対象者）の中でも新たな発見や気づきがあった」と思ってもらえるような、インタビュアーの配慮が求められよう。

私たちは、私たちの考えた結論を他者が追視、追認できるかどうか判断できるように配慮してきた。すなわち、本研究では、少なくとも、研究メンバーによって討議、選定された表3～7までのインタビューデータを公開し、その相互やりとりから、インタビュー対象者の語りが恣意的なものではなく、むしろ、すぐれた援助者が家族についてどういうことを考えてきたのか、家族に対してどのような視点を持っているのかを明らかにすることを試みたものであり、それについての批判及び検証を受けられるよう配慮したつもりである。

## V. 今後の課題

家族に対する対人援助職者の視点について、考察を試みたが、以下の点は課題といえよう。

一点目は、得られたデータをもう少し詳細に検討し、データによって推論されることが、もう少し多面的な意味合いを持っていたのではないかという点である。今後は得られたデータをより精査し、その意味をより多面的に考えていく必要がある。二点目は、本グループは社会福祉士と臨床心理士の資格を有する研究グループであったにもかかわらず、そのような特色からの考察ができなかったことである。異なる領域の専門職のグループであったので、そのような知見を今後加えていきたい。三点目としては、もう少し対象者の人数および対象者の所属する領域や職種などを増やし、同様の結果が出るのかどうかを精査することであろう。

今や、社会福祉士や臨床心理士といった、資格や領域から家族を考えるだけでなく、もっと多面的に、あらゆる方面から家族を考え、特に家族からの視点に配慮した関わりが援助職に求められよう。

## 付 記

本研究は、平成21年度「私立大学等経常費補助金特別補助 地域共同研究支援」・北翔大学「北方圏学術情報センター研究費」の助成を受けて実施された。

ご多忙の中、インタビュー調査をお引き受けいただいた5名の皆様、ならびに本研究には対象とさせていただくことのできなかったインタビュー協力者の皆様に心よりお礼申し上げます。

## 引用文献

1. 布施晶子：いま、日本の家族は（布施晶子・庄司洋子他編：現代家族のルネッサンス），青木書店，東京（1992）
2. 村瀬嘉代子：家族の変容とこころ，新曜社，東京（2006）
3. 能智正博：「よい研究」とはどういうものか—研究の評価—（下山晴彦・能智正博編：心理学の実践的研究法を学ぶ），新曜社，東京（2008）
4. 佐藤郁哉：質的データ分析法—原理・方法・実践—，新曜社，東京（2008）
5. 新村出編：広辞苑第五版，岩波書店，東京（1998）
6. 好井裕明：「調査するわたし」というテーマ（好井裕明・三浦耕吉郎編：社会学的フィールドワーク），世界思想社，京都（2004）

## 参考文献

1. 飯田昭人：対人援助職者の資質に関する一試論—心理的援助における援助者側の要因に焦点を当てて，人間福祉研究，第13号（2010）
2. 飯田昭人，寺田香他：対人援助領域における家族支援研究における動向と課題における考察，人間福祉研究，第12号，113-127（2009）
3. 村瀬嘉代子：心理臨床における質的研究の理論的検討と実践の展開（第1報）—児童養護施設における関与的観察調査に基づいて—大正大学カウンセリング紀要，30（2007）（In. 村瀬嘉代子：心理療法と生活事象，金剛出版，東京（2008）に所収）
4. 永石晃：重複聴覚障害をかかえる児童・青年期の人々とその家族への支援—子どもと家族への教育的・心理的支援の実践と展開，日本評論社，東京（2007）
5. 能智正博：質的分析法（下山晴彦・能智正博編：心理学の実践的研究法を学ぶ），新曜社，東京（2008）
6. 田中康雄：支援から共生への道—発達障害の臨床から日常の連携へ，慶応義塾大学出版会，東京（2009）

# Qualitative Analysis of the Perceptions of Human Services Professionals about the Families of their Clients

Akihito Iida Hokusho University School of Human Services Department of Psychology for Human Services  
Kaori Terada Hokusho University School of Human Services Department of Medical Social Work Studies  
Naoko Kurosawa Hokusho University School of Human Services Department of Medical Social Work Studies  
Mika Saito Hokusho University Student Counseling Office

## ABSTRACT

Perceptions of human service professionals about the families of their clients were investigated. Interviews were conducted with five human service professionals, including a social worker, a clinical psychologist, a clinical developmental psychologist and a teacher. Data were analyzed by qualitative analysis. Results indicated that not only unilateral support from the professionals, but active participation of the person concerned, as well as of the family was important. Moreover, variables related to the interviewees were analyzed and the best method of conducting qualitative analysis are discussed.

Key words : Family, Perceptions of human service professionals, A Qualitative Analysis